

No. 9

国公立大学における入試教科・科目の変化とその特徴
——昭和53年度と昭和54年度を比較して——

池田輝政・中島直忠 1984年3月

昭和54年度入試に共通第1次学力試験が導入されたとき、国公立大学は第2次試験の入試教科・科目をどのように定めたか。それを改革直前の53年度における入試教科・科目と比較するとき、どのような変化があったのか。その実態を分析して、問題点を探り出したのが、この研究である。

我が国の大学入試では、いわゆる主要5教科（国語・数学・外国語・社会・理科）の範囲における学力検査の成績を、主たる判定資料として入学者を選抜する方法が、支配的な傾向である。したがって入試教科・科目の定め方が適切か否かは、重要な問題の一つであるが、その考察には入試教科・科目の定め方を規定する要因とその諸条件を解明する必要がある。本稿はこうした分析に進む準備段階として、変化の実態の記述を中心にしたものである。

各大学は学生を募集するとき、学部・学科・専攻・課程等の単位を使い、入試教科・科目の出題型はかかる単位毎に定められる。入学者の選抜のために設定されるこの種の単位を「募集単位」と名づけ、出題型の分析には主として募集単位毎のデータを使った。

募集単位は、教員養成集団（教員養成を主目的とする学部）に属するものの集団）と、一般集団（その他の学部）に属するものの集団）に二分し、芸術・体育関係のものを除き、また昼間課程に限って今回の分析対象とした。一般集団については、さらに文科系・理科系に分類して考察した。

分析は、各集団毎に、主要5教科レベル（科目に細分しないレベル）と各教科の科目レベルについて出題型の年次変化を解明した。主たる結果は次のとおりである。

53年度には、いずれの集団も5教科全部を課する型の採用が多いが、科目レベルでみると集団間に顕著な違いがある。例えば国語については、文科系と教員養成集団は現代国語・古典I乙の2科目指定型を、理科系は現代国語を中心とする1又は2科目指定型を、多く採用した。

54年度の第2次試験では、出題する教科数は3～0に減少すると同時に、科目レベルの出題型に集団別の違いが顕著に現われた。しかしかかる違いは53年度の傾向の中にすでに存在していたものと、要約できる。